

# 詩がスポーツをうたうとき

1932年のロサンゼルス・オリンピックの場合

日比嘉高

✉ yshibi@lit.nagoya-u.ac.jp

This paper examines the intersecting concerns of poetry with those of the popularization of sports and mass mobilization through media. The case study presented explores the representation of an international sporting event, namely the 10<sup>th</sup> Olympic Games in Los Angeles in 1932, by specifically focusing on Olympics-themed poems, news articles featured in Japan's newspapers and related events, as well as the ideals of and contradictions within the modern Olympic Games. Regarding poems, this study surveys *tanka*, *haiku* and poems featured in Japanese American dailies such as *Rafu Simpo* (Los Angeles Japanese Daily News), a poetry collection titled *Kyoka*(Torch) that is composed of Olympics-themed free-verse *haiku* by haiku poets on the West Coast of the United States and Hawaii and in Japan, and also the award-winning works for *Asahi Shimbun's* fight-song lyric writing contest in support of the Japanese Olympic delegation. Also discussed are various contradictions within the modern Olympic Games, e.g., between amateurism and professionalism, internationalism and nationalism, individual competition and national competition, and equality in sports and racial or ethnic discrimination, as they are mirrored in the lyrics.

**Keywords** Olympic Games of Los Angeles in 1932(1932年のロサンゼルス・オリンピック), poem(詩), haiku(俳句), Japanese Americans(日系アメリカ人), representation of sports(スポーツの表象)

## 1 近代オリンピックの理想と困難

人は、躍動するスポーツ競技者の向こうに何を見るのだろうか。とりわけその競技者が、何かの「代表」——たとえば国家の——である場合、その鍛え抜かれた身体と、そうした身体同士が鎗を削る競技の空間に、観客たちは何を見ているのだろうか。もちろん、超一流のアスリートたちのため息が出るような技術の饗宴が、スポーツ観戦の醍醐味であることは言うまでもない。だが、それと同時に、スポーツする身体には、そしてその勝ち負けには、社会的な意味が付きまとう。スポーツの空間は、競技の場であると同時に、意味の闘争の場である。

この論考では、詩と、スポーツの大衆化、メディアによる大衆動員という三つの問題系の交差を考える。具体的には、1932年のロサンゼルス・オリンピックを取り上げ、これを題材に創作された詩歌、近代オリンピックの発展と変容、大規模に産出された関連報道と諸企画を検討し、大衆化時代の文学表現について一つの事例研究を行いたい。

野球をはじめとした近代スポーツは、はやくも明治期から日本に導入されていたが、その知名度やファン層が大衆にまで拡大していくのは1920年代後半からである。1920年代半ばから二万人規模の野球スタンドが東京・阪神に建設されはじめ、大手新聞社が野球、テニス、水泳、陸上競技などの大規模な大会を企画していく。ラジオ放送が始まり、各種学校の運動部の数も増加の一途をたどっていく。<sup>1</sup>

スポーツ人気の増大に国家が無関心だったはずはない。1923年の極東オリンピック大会では天皇杯が下賜され、1924年には現在の国民体育大会の前身である明治神宮競技大会が内務省主催で開催される。坂上康博の考察によれば、1928年以降には、スポーツが「国民思想の善導」の道具として、国家政策の中に位置づけられていく道筋もたどる。<sup>2</sup>

スポーツ人口の拡大は、階層、地域、民族、年齢、性別を超えたスポーツの浸透を意味する。野球をはじめとする人気スポーツへの国民的な関心、女性アスリートの登場、植民地や移民地でのスポーツの発展など、大きな変化が到来していた。さらにいえば、こうしたスポーツの大衆化に伴う変化は、日本においてのみ起こっていたのではない。スポーツ文化の広がり、世界的規模で起こっており、それゆえにこそ、オリンピックをはじめとした国際競技大会の注目度が高まっていた。

ピエール・ド・クーベルタンの提唱によって近代オリンピックが始まったのは、1896年のアテネ・オリンピックからだった。当初は万国博覧会と抱き合わせで開催されることが多く、小さな規模でのスタートだったが、次第に参加国、参加選手を増やしていく。日本人選手が初めて参加したのは、1912年の第5回ストックホルム大会からである。

オリンピックの再興に際し、クーベルタンは、スポーツによる肉体と精神調和や、祝祭的な非日常空間の創出による平和の演出など、高い理念を掲げた。その理念は共感と呼んだ一方で、現実の国際的競争と衝突の中で、さまざまな矛盾——アマチュアリズ

<sup>1</sup> 坂上康博『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略——』（講談社、1998）。とくに第一章を参照。

<sup>2</sup> 坂上、前掲書、第三章参照。

ムとプロフェッショナリズム、国際主義とナショナリズム、個人主義(個人競技)と国家主義、スポーツもとの平等と人種・民族差別など——をあらわにしていく。<sup>3</sup>

オリンピックへの日本の参加に関して言えば、1928年の第9回アムステルダム大会が一つの画期となる。三段跳びの織田幹雄と200m平泳ぎの鶴田義行が金メダル、陸上800mの人見絹枝が銀メダルを取った他、日本人選手の活躍が報じられ、国内のオリンピックへの注目度が一気に高まった。このころから、スポーツ・イベントによる人々の動員力に注目が集まり、大手新聞社によるスポーツ・イベントの創出が大規模化していき、海外から著名な選手やチームを招聘するようにもなっていく。<sup>4</sup>

スポーツの大衆化と国際化、そして国家的動員へという時代の中で、文学の言葉もまた変化していく。野球や卓球などの運動の場面が1910年以前の小説に描かれたことがないわけではもちろんないが、スポーツがその時代の風俗を切り取る特権的なモチーフとなったのは、やはり1920年代以降である。スポーツを描くモダニズム文芸を鋭くかつ包括的に分析した中村三春は、1930年を挟む10年ほどを「未曾有のスポーツ小説全盛時代」だったと評している。<sup>5</sup>

この論考では、1932年のロサンゼルス・オリンピックを題材にしなが、大衆化時代における詩の表現、および創作の場のあり方を、東京・大阪の両『朝日新聞』(以下あわせて『朝日新聞』と表記する)が募集したオリンピック選手応援歌、移民地の邦字新聞掲載のオリンピック関連詩歌、そして太平洋を越えて自由律俳句の結社が編んだ句集を取り上げて考えてみたい。

## 2 『朝日新聞』のオリンピック選手応援歌

1932年の4月17日に、『朝日新聞』はオリンピック派遣選手の「応援歌」を募集した。<sup>6</sup> 『日本選手を勝たしめよ』これ八千万同胞の声でありスローガンである。日本選手を勝たしむる道は全国民の力ある精神的支援でなければならない」と呼びかけたこの企画は、賞金総額1000円をうたい、大々的に募集を始めた。仕掛けは成功を収め、応募総数は4万8681通を数える。一等当選者は当時中学生だった齋藤龍で、同作品は山田耕筈によって曲も付され「走れ、大地を」と題してレコードが販売された。<sup>7</sup>

3 川本信正「オリンピックとインターナショナリズム」(『スポーツナショナリズム』大修館書店、1978)。武重雅文「近代オリンピックの宿命——マス・デモクラシーとオリンピック——」(亀山佳明編『スポーツの社会学』世界思想社、1990)。

4 坂上前掲書、第一章。また津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』(同文館出版、1996)。

5 中村三春「モダニズム文芸とスポーツ——阿部知二「日独対抗競技」の文化史的コンテクスト——」(『修辭的モダニズム——テキスト様式論の試み——』ひつじ書房、2006)。またこの時代のスポーツを描く文学作品については、以下の考察も行っている。疋田雅昭、日高佳紀、日比嘉高編『スポーツする文学——1920-30年代の文化詩学——』(青弓社、2009)。

6 『東京朝日新聞』(1932.4.17, 朝刊)。

7 『東京朝日新聞』(1932.5.6, 朝刊)。

実はこうした『朝日新聞』の仕掛けには先例があった。同年の2月28日から3月10日にかけて募集していた懸賞「肉弾三勇士の歌」である。「肉弾三勇士」とは、上海事変で爆死した工兵3名のことで、軍神として美談化されたものである。こちらの方は応募総数が12万4561通と2倍以上の開きがある。当然だが、スポーツよりも戦争の方が関心を集めたということだろう。

こうした1932年の世相を切り取ったテキストが、坂口安吾にある。「天才になりそなつた男の話」<sup>8</sup>という短編小説である。

この詩人〔菱山修三〕が外国語学校を卒業したとき、朝日新聞へ入社試験を受けた。ところがこの男学生時代といふもの完全に新聞を読んだことがない。書齋と学校の他には何一つ知らないのである。丁度その年は満洲事変の勃発したばかりの頃で、街頭いたるところに襷掛けの中年婦人が千人針といふものを勧誘してゐる。四方八方が肉弾三勇士のレコードでまことに物状騒然たる有様である。そのうへ羅府のオリンピックでこれが又一景気だ。先生戦争の方だけは街の様子で、どうやら近いところでやつてゐるなどいふことを感づいてゐたらしい。

オリンピックの方は銀座の食堂の名前も知らないのだ。新聞を読んだことがなくて新聞社へ試験を受けに出向いたといふ、勝負は始めから判つてゐるが、勿論美事に落第した。羅府といへばオリンピック、それにハリウッドでも思ひだしておけばいいので、太平洋岸に面し気候温暖と書く奴は当節君一人だらうと私が大いに彼の迂闊をせめたところ、君そういふ悲しい世の中かねえといつて嘆いてゐるが、  
〔…〕

安吾の小説は、世間に疎い詩人という仕掛けを用いながら、戦争へと傾斜する満洲事変下の日本の世相を巧みに描写している。千人針の勧誘の声が掛かり、四方八方で肉弾三勇士のレコードが鳴り響く。物語は、戦争の雰囲気が濃くなっていく騒然とした世情のなかで、オリンピックが開催されたことを伝えてくれる。そしてまた、羅府＝ロサンゼルスが、オリンピック以前は「太平洋岸に面し気候温暖」という地理気象にまつわる一般的なイメージしかもたれていなかったということも、ここからわかる。

さて、応援歌懸賞で1等当選した齋藤龍の作品は、どのようなものだったのだろうか。

走れ！ 大地を  
力のかぎり  
泳げ！ 正々  
飛沫をあげて  
君等の腕は

<sup>8</sup> 坂口安吾「天才になりそなつた男の話」（『東洋大学新聞』第120号，1935.2.12）。引用は『坂口安吾全集01』（筑摩書房，1999），pp.461-462。



君等の脚は  
我等が日本の  
尊き日本の  
腕だ！ 脚だ！

跳べよ！ 雄々しく  
地軸を蹴りて  
投げよ！ 堂々  
青空高く  
君等の力は  
君等の意気は  
我等が日本の  
輝く日本の  
力だ！ 意気だ！

揚げよ！ 日の丸  
緑の風に  
響け！ 君が代  
黒潮越えて  
君等の誉は  
君等の栄<sup>はえ</sup>は  
我等が日本の  
青年日本の  
誉だ！ 栄だ！<sup>9</sup>

「審査を終わりと」と題された『朝日新聞』担当者のコメントは、「第一等に決定した一編は句々<sup>「マア」</sup>節節に青年日本の意気があふれ、かつ率直な現代語的発想の自由な韻律は音楽的効果においても新しいものがあり、われらの代表をオリンピックの世界的感動の中に送つて、彼らの使命と活動とを全国民的統合のもとに激励し感謝しようとする雄大壮健な意図が、遺憾なくあらはれてゐるといへよう」と述べた(同5月6日)。この担当者の言葉にある「全国民的統合」がまさにこの企画の企図していたところだろう。詩の言葉には、統合への指向に合致する構図が反復されているのがわかる。オリンピック選手たちに呼びかける形で、「君等の腕」「君等の足」「君等の力」「君等の意気」「君等の誉」「君等の栄」が、「我等が日本」のそれと一致するのだと、歌は反復している。

この構図は、1等以外の入選詩でも等しく見られる。優秀作品となった阪口保の作品も「選手の心は 日本のこころ」と繰り返していたし、朔禮鮎之介も「海のあなたで 君が代が／うたはれるとき こちらでも／声をそろへて うたひませう」(／は原文改行。以

<sup>9</sup> 『東京朝日新聞』(1932.5.6, 朝刊)。

下同)という詩を作っていた。<sup>10</sup>

『東京朝日新聞』の記事によれば、応援歌「走れ、大地を」は、華々しく発表会が開催され、その模様はラジオでも放送された(5月21日)。その後も繰り返し、陸上の最終予選で(5月29日夕刊)、選手を送り出す駅頭で(6月24日夕刊)、ロサンゼルスで迎え出た歓迎船の甲板上で(7月10日)、出迎いの棧橋で(7月11日)、日本人街で(7月13日)演奏され、合唱されていた。選手の身体・心・荣誉と、日本の国民のそれとを一致させようとする応援歌は、国際的なスポーツ競技会の興奮と併走しながら、人々の歌声を統合し、ロサンゼルスと日本国内とを結びつけようとしていたのである。

### 3 『羅府新報』のオリンピック詩歌

ロサンゼルスへと海を越えてやってきた日本の選手団は、米国西海岸の日系人(在米日本人、日系アメリカ人)たちのコミュニティを熱狂させた。米国に日本人が出稼ぎに行き始めたのは明治初期にさかのぼる。当初はハワイ王国への官約移民として多く渡ったが、その後次第に移民会社の主導へと移り、米国本土へも多くの人が渡航していく。労働移民だけではなく、留学生や商人など多様な人々が米国に居住したが、人口が増えるに従って排日運動にも直面するようになる。1907年の日米紳士協約で労働移民が禁止され、1924年にはいわゆる排日移民法が可決されて、新規移民の道が完全に閉ざされた。US Censusによれば、ロサンゼルス・オリンピックの時代、1930年代の米国日系人の人口は全体で278,465人、西部で131,669人となっている。<sup>11</sup>

ときに激しい排日運動に直面し、白人が優勢な米国社会のなかでマイノリティとして生きる日系人たちは、米国や西欧の代表選手たちを打ち負かして、表彰台へと上る日本の選手団に喝采を送った。日系一世たちにとっては生まれた祖国への誇りをあらたにする機会となり、アメリカ生まれの二世たちにとってはまだ見ぬ祖国への憧れをかきたてる契機となった。<sup>12</sup>

ロサンゼルス・オリンピックは、米国の文学趣味をもつ日系人にとっても一つの大きなイベントだった。ロサンゼルスを発行地とする邦字新聞『羅府新報』には、大会が始まる前、選手団を待ち受けるときから、大会が終了した後まで、多くの詩歌が掲載された。選手を乗せた船が入港するようすを捉えた詩歌をいくつか見てみよう。

羅府の港の 夜あけの沖へ  
ついた／＼よ 日本の船よ

<sup>10</sup> 『東京朝日新聞』(1932.5.6, 朝刊).

<sup>11</sup> 北米への日系移民については、日比『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所——』(新曜社, 2014)を参照。

<sup>12</sup> Yamamoto, Eriko. "Cheers for Japanese Athletes: The 1932 Los Angeles Olympics and the Japanese American Community." *Pacific Historical Review* 69.3 (2000) : 399-430.

波はゆら／＼ 旭をうけて  
船は日の丸 輝く選手  
ふれ／＼旗ふれ  
君が代うたへ  
われ等同胞の  
血は湧き上る！〔…〕<sup>13</sup>

〔…〕 くもりびの  
サンピイドロ港で  
むやみに振った旗  
感激に胸ふさがつて  
まち／＼に唱った  
あの応援歌や  
下手なエールで  
あつて、それで好い〔…〕<sup>14</sup>

前者塚本嶺南の「輝く選手」が掲載されているのは7月9日、選手団の第一陣がロサンゼルスへ到着した日である。埠頭には日の丸が翻り、「迎へる者、迎へられる者二千人の大合唱となつてロサンゼルス港に響き渡」<sup>15</sup>つたという。後者片井溪巖子「日の丸 われらの選手におくる」も、同じ応援歌に和するようすを描いている。

オリンピック選手団を迎える興奮は、俳句にも詠まれた。櫻井銀鳥による連作では「オリムピック選手を迎ふ」と題して、「夏山の晴れ行くなべに船進む」「日暑しにじりより来る巨き船」「八幡の幟押したて上りけり」などとという句が並ぶ。<sup>16</sup> 異郷で暮らす日系一世たちにとって、輝かしい祖国の代表を乗せた船を迎えるということは、まさに「血は湧き上る」ような経験だったのだろう。

オリンピックの描く『羅府新報』の詩歌に繰り返し登場するのが日の丸、日章旗である。タイトルそのものに国旗を含んだものに、片井溪巖子「日の丸 われらの選手におくる」(7月28日)、石河小夜子「翻へる日章旗」(8月11日)、富山青子「日の丸の旗 オリムピックスタジアムにて」(8月18日)がある。本文に日の丸、日章旗を含むものは、含まない詩歌よりもむしろ多いかもしれない。片井溪巖子「日の丸 われらの選手におくる」は、「長らく外国にゐて／うれしき限りは／日の丸／ちらりと見てさい／血はおどる／こころは躍る」と歌った。藤井牛歩「感激の刹那」(8月11日)は「強い／＼感激と／満場の拍手のうちに／紺碧の空、高く翻へる／おゝ、我が日章旗／観よ、燦然と輝く／おゝ、我が日の丸」と描く。俳句ではたとえば、「雄々しきや夏空高く大国旗」(田中柊林)<sup>17</sup>があり、短歌

<sup>13</sup> 塚本嶺南「輝く選手」(『羅府新報』1932.7.9).

<sup>14</sup> 片井溪巖子「日の丸 われらの選手におくる」(『羅府新報』1932.7.28).

<sup>15</sup> 『東京朝日新聞』(1932.7.11, 朝刊).

<sup>16</sup> 櫻井銀鳥「松霞亭小集 夏季雑詠」(『羅府新報』1932.7.14).

<sup>17</sup> 「松霞亭小集 雑詠」(1932.8.11).

には「はらかなのたましひ籠る日のみ旗しばし仰げり諸人共に」(富山青子)がある。<sup>18</sup>

オリンピックによって煽られたナショナリズムのために、日の丸の表象が反復的に登場するのは、たしかに陳腐な光景ではある。だが現代的な視線から裁断することを抑制して、移民地であったロサンゼルスに日の丸が翻る、ということの意味を考えてみる必要もあるだろう。おそらく、1930年代のロサンゼルスの街中で、日の丸を大々的に掲げることは稀だった。外国だったから、ということももちろんだが、なにより日系人たちは排日的な感情を刺戟することを避けようとしていたはずである。オリンピックは、そうした日系人の抑制を解除する格好の機会となったのである。

また実際に、人々は膨大な数の日の丸を目にしていたのだとも考えられる。『羅府新報』の報じるところによれば、大阪毎日新聞社は、歓迎の旗を二万本送ってきていたという。<sup>19</sup> 大阪毎日新聞社の送ったもの以外にも多くの旗が用意されたであろうから、大会期間中のロサンゼルスの日本人街には、溢れるほどの日の丸が躍っていたはずである。

期待に違わず、日本人選手たちはロサンゼルス大会で好成績を挙げた。男子陸上競技で金1、銀1、銅2、男子水泳で金5、銀4、銅2、馬術で金1、女子水泳で銀1のメダルを獲得した。日本人選手が勝てば、競技場に日の丸が揚がる。それは、日系人たちの鬱屈を晴らす、シンボルだった。

ロサンゼルスの青空に  
燦然と、実に燦然と  
翻へつてゐる  
日章旗の幾本、  
感激の極みで、身はふるへる  
歓喜の涙が先づ落つる。<sup>20</sup>

詩歌の歌い手たちの感激は、オリンピックのあおり立てたナショナリズム同士の衝突に、たしかに単純に感染しているということもできる。だがこれほどまでに喜び、日の丸を繰り返して描いた彼らの心情は、移民地での苦難の日々を背景においてみなければ理解できない。ある歌人は、次のような歌を詠んでいる。

今更に思ほゆるかも外つ国にたゝかひ生くる闘士ぞわれらも<sup>21</sup>

ロサンゼルスに生きる日系人たちにとって、オリンピックはただのスポーツ大会ではなかった。それは傷つけられがちな彼らの誇りを回復するための代替的な闘争であ

<sup>18</sup> 富山青子「日の丸の旗 オリムピックスタジアムにて」(『羅府新報』1932.8.18)。

<sup>19</sup> 「オリムピック選手 歓迎旗二万本 大毎支局から寄贈」(『羅府新報』1932.7.8)。

<sup>20</sup> 石河小夜子「翻へる日章旗」(『羅府新報』1932.8.11)。

<sup>21</sup> 富山青子「日の丸の旗 オリムピックスタジアムにて」(『羅府新報』1932.8.18)。

り、またフィールドは異なりこそすれ同じく「たゝかひ生くる闘士」であることの確認の場としてあったのである。

#### 4 海を越える『炬火』

文学趣味をもつ日系人たちは、オリンピックを機に、「沿岸俳句大会」という大きな句会を開催した。この句会の成果は翌年、『炬火』という句集に収められる。編者である岡村眸子鳥は、『炬火』の巻末でこれを次のように紹介している。

▲此の句集はアゴスト社同人の句録として出版したい多年の宿望であつたものを、偶々一千九百卅二年夏季に於て当地で行はれたオリンピック大会の好機を捉え開催した沿岸俳句大会をも亦、記念すべく同時に纏めて印刷刊行したものである。

▲一千九百卅四年八月の或る日、当時海紅俳句を熱心に読んでゐた同人、嶺山四門君と二人で思ひついたのがアゴスト社である。序だがアゴスト(AGOSTO)とは西語の八月を意味する。〔…〕

▲沿岸俳句大会は八月六日夜七時より始めて翌朝五時に終つた。サンフランシスコ、フレズノ其他の地方から酷暑の中を多数出席して呉れて仲々の盛会であつた。日本各地、及び布哇からの送句は距離の関係で間に合はなかつたが総数二百三十句の送句を得て彼の大会をして更に輝しいものとなつた。此等の送句は直ちに当地の新聞に掲載し更らためて今度此の句集に再録したものである。<sup>22</sup>

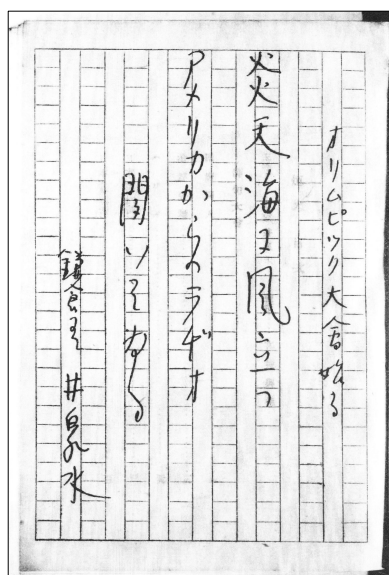


図 『炬火』巻頭に掲げられた井泉水の句

興味深いのは、この『炬火』が在米の日系人だけの作句によって構成されているわけではないということである。句は、結社の縁をたどって、太平洋を跨いで集められた。参加した在米の俳人下山逸蒼は、故国への手紙で次のように述べている。「ここに「句集炬火」といつて〔、〕一昨年ロスアンゼルスオリンピック大会があつたそれを機会に〔、〕ロスアンゼルスのアゴスト社といふ新しい句の同人が太平洋沿岸の俳人に檄を飛ばして記念の俳句大会やつて〔、〕俺も中原から旅費送ってもらつてそれに列席したのはキオクしてるだろう〔。〕つまりその記念句集なのだ(コレはひとり太平洋沿岸の人々のみならず故国では「層雲」から二十一人「海紅」からは二十二人ハワイからは九

22 岡村眸子鳥「巻末に——」(『炬火』アゴスト社：ロサンゼルス、1933)、pp.184-185.

人ロスアンゼルスからは十三人、)沿岸からは八人といふ多勢のものをあつめ〔、〕東京の三秀社で印刷した黒無地表紙のそれこそ申のない体裁のものがある」。<sup>23</sup> 米国本土の各地だけではなく、ハワイ、そして日本の結社層雲と海紅の社中からも参加者があった。海を越えた選手団は、太平洋を跨いだ句の往還を刺戟したわけである。

この意味で、『炬火』の冒頭に掲げられた荻原井泉水の句は、象徴的である。「オリンピック大会始る」と前書きされた句は、次のようなものである。

炎天海に風立つ  
アメリカからのラヂオ  
聞いてゐる

井泉水はこのとき鎌倉にいた。東には、太平洋が広がる。オリンピックは日本国内でも始めてラジオ放送された。実況放送を目指したが、それがかなわず「実感放送」という、アナウンサーが回想しながら実況であるかのように伝える放送になったということは、放送史上よく知られたエピソードだ。<sup>24</sup> 井泉水が聞いたのは、このロスアンゼルスから届けられたラジオ放送だった。炎熱の夏の海に、ロスアンゼルス熱戦を伝えるかのように、風が立つ。作者はその海の方を眺めながら、ラジオから流れるアナウンサーの声に耳を傾けているのだろう。ラウドスピーカーからの音に耳を澄ませる室内の静けさが、際立つようだ。鎌倉の自室と、熱暑の太平洋、そして競技の進行するロスアンゼルス。それらを超えてアナウンサーの声が響き、そしてその声を追いかけるように、井泉水の句が海を渡っていく。

『炬火』に収められた、他のオリンピック関連句も見てみよう。<sup>25</sup>

オリンピック  
日章旗あがる瞬間のどよめきに涙あふるる 佐藤一水(羅府)  
槍投  
穂尖せんせんと蒼空を描きゆく虹

オリンピック所見  
勝たねばならぬ肉弾戦へ炎天 高山泥草(羅府)  
日の丸を仰いだ満足に帰ります

スタンドの炎天へ絵日傘咲き競ふてゐる 下山逸蒼(桑港)

<sup>23</sup> 下山逸蒼の下山四郎宛書簡(1934年10月21日付書)。桑井輝子「〈資料紹介〉下山逸蒼資料について」(『JICA横浜海外移住資料館 研究紀要』第6号, 2011), pp.61-62による。

<sup>24</sup> 山口誠「メディアが創る時間——新聞と放送の参照関係と時間意識に関するメディア史的考察」(『マス・コミュニケーション研究』第73号, 2008.7)。竹山昭子『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』(世界思想社, 2002)。

<sup>25</sup> 同句集にはオリンピックに関係しない句も数多く含まれている。



炎天へ燃え熾かる彼の炬火のいろ  
レース合図のピストルを天に向けた刹那  
五大洲へ別かれ散る握手の手の熱

日の丸吸ひ込む青空の深さ  
飛躍の絶頂で八千万を担った顔だ

佐瀬暁(帝国平原)

日系1世たちと思われる俳人の句を集めた。一見して目だつのが、オリンピックを契機に目指された国民的統合に呼応するかのような表現である。日章旗や日の丸という表現が数多く現れている。「日章旗あがる瞬間のどよめきに涙あふるる」と読んだ佐藤一水(羅府)などは典型的とっていいだろう。また「飛躍の絶頂で八千万を担った顔だ」(佐瀬暁、帝国平原)も、国民を代表して跳躍するものとして選手の顔貌を切り取ってみせた句である。ただ、「日の丸を仰いだ満身に帰ります」と詠んだ高山泥草(羅府)の句などを見て、彼がいったいどこへ帰ったのかと考えてみたとき、日本国内で目指された国民的統合が米国に生きる日系人たちに、乖離を含みながら届いていたということを思い起こさせる。

日系人たちがもっていたであろう祖国との距離感を考えながら『炬火』を眺めたとき、国内の俳人、たとえば中塚一碧楼(東京、『海紅』派)による句などは、単純なナショナリズムの感情に浸されていると言わざるをえない。

遙かにオリンピック競技を思ひ  
鉢巻よ吉岡よ今トラック爽やかに  
南部朗かに飛べよわれらに日の光りあり  
水泳いくたび日の丸をあげる水はひかるに

中塚は「遙かに」と枕してロサンゼルスとの距離を示しているが、むしろ彼の句からうかがえるのは、自身と代表選手、そして彼らを応援する国民との幸福な＝無自覚な一致である。

ここで興味深いのは、中塚ら日本国内にいた俳人たちは、選手たちの競技のようすを実際には目にすることなくこれらの俳句を詠んでいるということである。この時代、オリンピックの模様を伝えたのは、活字メディアか、ニュース映画、もしくはラジオである。あたかも目の前で走り、跳躍し、力泳しているかのように詠まれている日本の俳人たちの句は、新聞やラジオなどの情報をもとに制作されたはずである。

あるいは逆説的に言えば、こうしたやすやすと空間と時間を越え、情報量の空隙をさへ埋めてしまう想像力こそが、幸福なナショナリズムを高揚させえた秘密なのかもしれない。日本人選手の勝利を讃える新聞報道やラジオの「実感放送」による物語化を経て、さらにその上で詠じていたのだとすれば、物語化に逆らうノイズはより少なくなるだろう。



こうした日本国内の句作との対比を考えた時に面白いのは、日系人たちによるオリンピック詠には、オリンピックという祝祭が過ぎ去ったあとの風景が詠まれているという点である。

#### オリンピックの跡

烽火は消え塔は高く月夜の空

関谷蓬朗(羅府)

オリンピックもすんで了つた口あいてゐる庭の無花果

唐津文夫(羅府)

日本勝てえの風船も揚がつた空で

オリンピックも歴史となつて了つた緑草にすわる

羽田馬門(羅府)

選手団は、競技会の日程にあわせて会場へ向かい、競技を行い、そして帰国する。日本の国民も、選手団を送り出し、選手の奮闘を応援し、帰国した彼らを迎える。この両者にだけ目を向けている場合、すなわち日本国内にのみ視座をおいている場合には、オリンピックは明確な始まりと終わりをもつ往還の物語となる。

だが、米国に住む日系人たちにとっての物語はそうではない。彼らにとってのオリンピックは、待つことによって始まり、去られて残ることによって終わる。彼らは、祭典が一過性のものでしかないことを強く意識したことだろう。オリンピックにちなんだものが去ってしまった後に、残った風物——「空」「無花果」「緑草」などに彼らは目を向ける。移民たちの生活は、そうした変わらない物どもとともに、米国の異土で継続されていくのである。

## 5 まとめ

今回の論考で言及したいくつかの論点について確認し、まとめに換えたい。大衆化したスポーツ・イベントは、詩歌の歌い手たちにもさまざまな形で訴えかけた。それは大新聞社が募集した応援歌の懸賞という形を取ることもあれば、結社のネットワークによる競作という形を取ることもあった。屈折した感情を抱えながら移民地に生きる日系人たちの、心情を托す媒体ともなった。

オリンピックというスポーツ競技会は、国際性——すなわち数多くの国同士が集まって競争し合うところにこそ魅力と危うさがある。それはスポーツの名のもとに選手たちが鍛え上げた技と肉体と精神を平等に競い合う、美しく高い理想を掲げたものである一方、国と国とがプライドを賭けて衝突し、人間間の軋轢が表面化し、時代が下れば特定の国家のプロパガンダ的色彩さえ帯びるイベントともなっていた。文学の表象も、そこに巻き込まれていく。逆に言えば我々は、文学を読むことによって、そうした国際スポーツ・イベントが引き起こした葛藤のさまを、いま解読することができる。

オリンピックはナショナリズムを喚起するが、日本国内におけるそれと、移民地におけるそれとを等し並みにしないよう配慮しつつ論じねばならない。別稿での課題とせざるを得ないが、ロサンゼルス・オリンピックには、朝鮮半島と台湾からも「日本代表」が出ており、出身地域における彼らへの熱狂的支持も視野に入れるならば、ナショナリズムの種々の異なった展開のあり方を論じ分ける必要がある。

最後に、文学の表現こそが担った機能に注目しておこう。一つは、日本国内の俳人たちのオリンピック詠を検討したときに論じた、想像力による創作の問題である。文学作品の表現は、創作者が描く対象を実際に目にすることがなかったとしても、その対象を描き出すことができってしまう。それこそが文学という虚構が許された表現形態の自由さであり、能力である。その空想的に構築されたリアリティの中に読者を拉致しさる力は、1932年のオリンピックでも存分に発揮されていたわけだが、同時代に進みつつあった日本の大陸侵出を合わせて視野に入れ、その後の歴史の中で文学作品が果たした役割を考えに入れれば、想像力による動員の危うさもまた同時に指摘しておかねばなるまい。

また文学に関わる表現者および表現行為のネットワークにも目を向けておきたい。帝国の時代における国際的スポーツ・イベントとしてのオリンピックは、人々の移動と越境のありさまを浮き彫りにする場でもある。選手たちの多民族化・多人種化が進んでいたことはすでに触れたが、メディアを介してオリンピックに触れるオーディエンスたちもまた多様化していった。すなわち本考察の内容に即して言えば、「日本」代表選手に声援を送ったのは日本国内に住む日本人だけではない。そして文学の表現もこの人々の移動と離散のあり方に応じて変化する。新聞やラジオなどといった報道メディアもたしかに遠隔地の人々を結びつけたが、それとは異なるあり方で文芸に携わる人々も彼ら自身の紐帯を形成していた。その結びつきがたとえば句集のような形となったときに、異なる視線、異なる立場を含み持つテキストとなって社会の中で語り出すのである。

最後に、文学の眼差しのもつ特異さを考えよう。スポーツ・イベントを報じるメディアは、スポーツ・イベントの終了とともにその出来事への注目をやめる。だが、文学の眼差しはそうではない。スポーツ・イベントという観点からすれば、本来描くべき中心的な課題ではないところに、着眼する。祭りの後の風景が、たとえばそれである。祭典が終わっても、生活は続く。その当たり前だが、大手報道メディアの表象の中では無視されがちな現実を、詩歌の小さな声は語ってみせる。あたかも、打ち上げ花火は所詮打ち上げ花火でしかなかろう、とささやきでもしているかのように。文学の小さな一刺しである。

## 参考文献

- アゴスト社編(1933)『炬火』ロサンゼルス：アゴスト社。Agosutosha, ed. (1933). *Kyoka*. Los Angeles: Agosutosha.
- 川本信正(1978)『オリンピックとインターナショナルリズム』『スポーツナショナルリズム』。東京：大修館書店。Kawamoto, Nobumasa (1978). *Orimpikku to Intānashonarizumu. Supōtsu Nashonarizumu*. Tokyo: Taishukan Shoten.
- 桑井輝子(2011)『資料紹介』下山逸蒼資料について』『JICA横浜海外移住資料館 研究紀要』。第6号, pp.49-65.
- Kumei, Teruko (2011). *Shiryō Shōkai: Shimoyama Issō Shiryō ni tsuite. JICA Yokohama Kaigai Ijū Shiryōkan Kenkyū Kijō*. 6, 49-65.
- 坂上康博(1999)『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略——』東京：講談社。Sasaue, Yasuhiro (1999). *Kenryoku Sachi toshitenō Supōtsu: Teikoku Nihon no Kokka Senryaku*. Tokyo: Kōdansha.
- 坂口安吾(1999)『坂口安吾全集01』。東京：筑摩書房。Sakaguchi, Ango (1999). *Sakaguchi Ango Zenshū01*. Tokyo: Chikuma Shobō.
- 武田薫(2008)『オリンピック全大会——人と時代と夢の物語』東京：朝日新聞社。Takeda, Kaoru (2008). *Orimpikku Zentaikai: Hito to Jidai to Yume no Monogatari*. Tokyo: Asahishinbunsha.
- 津金澤聰廣編著(1996)『近代日本のメディア・イベント』。東京：同文館出版。Tsuganezawa, Toshihiro (1999). *Kindai Nihon no Media Ibento*. Tokyo: Dobunkan Shuppan.
- 竹山昭子(2002)『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』。京都：世界思想社。Takeyama, Akiko(2002). *Rajio no Jidai: Rajio wa Chanoma no Shuyaku datta*. Kyoto: Sekaishisōsha.
- 中村三春(2006)『モダニズム文芸とスポーツ——阿部知二「日独対抗競技」の文化史的コンテクスト——』、『修辞のモダニズム——テキスト様式論の試み——』東京：ひつじ書房, 189-245. Nakamura, Miharū (2006). *Modanizumu Bungei to Supōtsu: Abe Tomoji “Nichi-Doku Taikō Kyōgi” no Bunkashiteki Kontekusuto. Shūjiteki Modanizumu: Tekusuto Youshikiron no Kokorami*. Tokyo: Hitsuj Shobō, 189-245.
- 浜田幸絵(2010)『戦前日本のオリンピック——コミュニケーションの政治経済学的観点から——』『コミュニケーション科学』32号, pp.133-156. Hamada, Sachie (2010). *Senzen Nihon no Orimpikku: Komyunikeshon no Seiji-Keizaigaku-teki Kantenkara. Komyunikeshon Kagaku*. 32, 133-156.
- 疋田雅昭、日高佳紀、日比嘉高編(2009)『スポーツする文学——1920-30年代の文化詩学——』。東京：青弓社。Hikita, Masaaki, Yoshiki Hidaka, Yoshitaka Hibi ed. (2009). *Spōtsu-suru Bungaku: 1920-30 nendai no Bunkashigaku*. Tokyo: Seikyūsha.
- 日比嘉高(2014)『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所——』。東京：新曜社。Hibi, Yoshitaka (2014). *Japanizu Amerika: Imin Bungaku, Shuppan Bunka, Shūyōjo*. Tokyo: Shinryōsha.
- 山口誠(2008)『メディアが創る時間——新聞と放送の参照関係と時間意識に関するメディア史的考察——』『マス・コミュニケーション研究』第73号, pp.2-20. Yamaguchi, Makoto (2008). *Media ga Tsukuru Jikan: Shinbun to Hōsō no Sanshō Kankei to Jikan Ishiki ni kansuru Media-shi-teki Kōsatsu. Masu-Komyunikeshon Kenkyū*. 73, 2-20.
- Yamamoto, Eriko (2000). Cheers for Japanese Athletes: The 1932 Los Angeles Olympics and the Japanese American Community. *Pacific Historical Review*, 69(3), 399-430.

### 日比嘉高 Yoshitaka HIBI

(日本)名古屋大学大学院文学研究科。准教授。近現代日本文学、移民文学、戦前外地における書物流通、現代日本のトランスナショナル文学など。『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所』(東京：新曜社, 2014)、『(自己表象)の文学史——自分を書く小説の登場』(東京：翰林書房, 2002)、『外地書店とリテラシーのゆくえ——第二次大戦前の組合史・書店史から考える』(『日本文学』東京：日本文学協会, 第62巻第1号, 2013)。